

# 妙蓮寺蔵『松尾社一切経』の発見と調査

中 尾 堯

## はじめに

立正大学文学部史学科と大学院文学研究科史学専攻では、実習科目としてそれぞれ「古文書実習」という科目を設け、実地における古文書の調査・研究を行っている。その実習の一環として、京都市上京区寺ノ内通大宮東入ル妙蓮寺前町にある法華宗大本山妙蓮寺の古文書を対象に、平成四年度から作業を開始して今日に至っている。実習の内容は、平成五年夏に妙蓮寺の宝蔵から、この科目を履修する学生とともに発見した、平安時代の写経『松尾社一切経』についての調査と研究である。

この一切経が発見されてから、妙蓮寺の積極的な援助を受けながら、立正大学をはじめとする諸大学の学生諸君の献身的な協力を得て、長期にわたる集中的な調査と研究を重ねてきた。ようやく二年ばかりの月日が経過した今日、その全体像もどうやら把握できる段階となった。ここで今までの経緯を一応まとめて、調査の記録を整えるとともに、今後の研究についての基礎的な情報を確認しておきたいと思う。

一切経が新たに発見できる可能性はまことに少なく、ましてや平安時代後期に筆写されたそれが突然に姿を現すことは、ほとんど稀有なことといえる。この発見と調査過程をまとめて叙述することは、文化財の発見と伝来とその維持について確認することを意味し、それ自体ひとつの歴史を創出することになるだろう。ただし、ここでは中間発表の域にとどまるものであるが。

## 一、発見のいきさつ

妙蓮寺の書院前に広がる石庭の奥に土蔵があり、その二階に木箱にはいった大量の古文書や経典が、雑然と積み込まれていた。妙蓮寺には、かつて宝形造りの宝蔵が境内（現在は墓地）に設けられていて、宝物類はこの中に納められていたが、別の場所に鉄筋コンクリート製の収蔵庫ができたのを契機に、著名な寺宝はここに移された。しかし、その他の古文書や経典は土蔵の二階にいれられて、その価値もいつの間にか忘れ去られていた。平成四年の夏に、これらの古文書を整理することを、藤井照源師を通して妙蓮寺の松下日肆執事長から要請されたのである。

平成四年八月二十一日から開始した第一段階の調査にあたっては、近世中期から近代初期にいたる古文書をまとめて書院に運び出した上で、これを一点ごとに分類用の紙袋（中性紙製）に分けて入れることだけで、予定された三日間の日程が終わった。これらの中には、妙蓮寺が「仏立講」という法華系の在家信仰集団の拠点であった当時の古文書や記録が多く、幕末から明治初期にわたる当寺の動向をよく窺うことのできる豊かな内容を持っている。しかしながら、この段階では古文書に初期的な手当てを施すにとどめ、分類カードをとり文書目録を作成するには至らなかった。当然のことながら大量の経巻があることは確認していたものの、荒廃の激しい経巻そのものにはまったく手をつ

けず、あらためて翌年の調査を期したのである。

第二段階の調査は、「古文書実習」の実地作業として、平成五年八月二十三日から二十五日までの予定で開始した。参加者は前日の二十二日の午後に妙蓮寺に集合して、作業の手順について打ち合わせを行い、翌日の午前九時から書院において作業を開始した。ちょうど地蔵盆のころで、折からの猛暑で全員汗を流しながら、土蔵の二階から経巻の入った重い木箱を次々と運び出し、ビニールシートを敷いた書院の部屋に広げる。激しいホコリやゴミで、とても汚くきつい作業であったが、大学院生・学部生ともに熱心に取り組んでいた。これらの経巻を見ると、ずいぶん良質の料紙に墨書の写経があり、量的に見てもただならぬ気配を感じさせるものであった。

木箱から取り出した経巻の掃除を進める一方、これらがどのような性格の経巻かを確かめるために、そのうちの数巻を取り出してこれを広げ、奥書にある年紀を調査する作業を大学院生に担当させていた。しばらくの後に大学院生の大本敬久君が、「永久三年（一一一五）」と年号のある奥書を見出したのを皮切りに、「松尾社一切経」の朱印や「地蔵院一切経」の黒印、「秦」氏一族の人名などを次々に見出したので、これらがかつて松尾大社に伝わった「松尾社一切経」に間違いのないことがはっきりと確認できた。これらの経巻が「松尾社一切経」であることをさらに明確にすべく、京都国立博物館の赤尾栄慶氏に照会するとともに、文化庁の湯山賢一氏に報告した。

このような経緯で発見された「松尾社一切経」は、はじめは二百巻ばかりのものと思っていたのであるが、やがて相当な量に上る経巻が次々と発見された。かくて、全部の一切経を宝蔵から運び出した時には、「松尾社一切経」の大半の部分がここにあることが、感触としてわかった。経巻の入った木箱は白木の檜材で作られた「経櫃」で、経巻は側面に墨書された経名とは関係なく、無造作に入れられて湿気でピタリとくっついていて、箱書きによると、これらの経櫃は室町時代中期の文安四年（一四四七）に新しく造られたものである。

妙蓮寺の宝蔵から発見された「松尾社一切経」は、三十五個の経櫃に雑然と入ったものと、宝蔵の一階の土間に置かれたもうひとつの長持に納められたものと、合わせて約四〇〇〇点ばかりにも上る。もちろん、この中には開卷不能なものや、湿気に侵されてほとんど軸だけになったもの（これは長持にはいつていた経巻で、水損による被害が甚だしい）を含んでのことである。一切経はほぼ五千余巻からなるとされているから、その大半が妙蓮寺の宝蔵から発見されたことになる。

ちなみに、この他に現存している「松尾社一切経」は、京都市左京区の法然院に四十五巻と、京都国立博物館に一巻、合わせて四十六巻だけの少数である。したがって今度妙蓮寺の宝蔵から発見された「松尾社一切経」はその大部分を占め、これまで杳として行方のわからなかったこの一切経の全貌がほぼ明らかになった。

妙蓮寺の宝蔵から平安時代の一切経写本が発見されるということは、当寺としてもまったく予期していなかったことで、この出来事は寺の内外に大きな波紋をよんだ。新しく就任した住職の吉村日義師と、新執事長の飯田信栄師は、早速この調査事業に対して全面的な援助を約束され、文化庁と京都府の指導を受けながら、全体的な調査計画を立てることとなった。

## 二、調査計画

「松尾社一切経」の調査は、いくつかの重要な要件を持つものであったから、これを十分考慮に入れた上で計画を立てなくてはならない。その留意すべき点の第一は、国の重要文化財級の一切経であるから、取扱に慎重な注意を払いながらも、早急に整理を完了して全体像を明確に把握しなくてはならないことである。第二は、一切経の現状を多

項目にわたって調査カードに採録し、公開の上容易に利用できるデータとしてまとめる一方、綿密な研究を同時に行わなくてはならないことである。第三は、他の一切経調査の成果を参照しながら分類目録を作成し、これに準拠した経巻の整理が終わった段階で、保存管理についての見通しを立てることが要求される。第四は、一切経の現状を視覚上のデータとして忠実に伝えるため、入念な写真撮影による資料の集積が必要である。第五は、調査研究の総括として、詳細な調査報告書を刊行することである。

これらの要件を十分に確認して調査期間を三年間と定め、平成八年中に報告書を刊行することを目指し、次のような計画を立てて実行に移った。

## I 調査体制

- 1、妙蓮寺蔵『松尾社一切経』の調査は、法華宗大本山妙蓮寺の事業として位置付け、調査の実施は文化庁と京都府の指導を仰ぎながら、立正大学文学部教授中尾堯の責任において実施する。
- 2、この調査は、主に立正大学の「古文書実習」の一環として行い、その上に他大学・研究機関からの参加希望者を加えて、授業の形で実施する。
- 3、他の大学や研究所に所属する教員・所員・学生を積極的に招き、共同作業をすることによって、学術上の交流とより高い研究の達成を図る。
- 4、貴重な文化遺産であるから、文化庁・京都府教育庁との間に緊密な関係を維持し、研究成果の公開については積極的に取り組むこと。

## Ⅱ 調査日程と作業内容

- 1、第一次調査 一切経を経櫃や長持から取り出して、付着した埃や塵などを入念に払った上で、虫損や水損に注意を払いながら丁寧に開巻する。ついで、これを一巻ずつ中性紙製の袋に入れた上で、仮箱に入れる。
- 2、第二次調査 詳細な調査カードを文化庁の指導を受けながら作成し、各巻についてのデータを厳密に採取する。ついで、調査の終了した経巻を一巻ずつ和紙製の袋に入れ、経名を表記して仮箱に入れる。
- 3、第三次調査 整理と調査が終わった一切経の全体を、『貞元釈教録』と題する一切経目録の記事にしたがって順序よく配列し、保存用の中性紙製の保存箱に分けて入れる。また、『貞元釈教録』に準拠した全体の現在目録を、パソコンを用いて一覧表の形で作成する。
- 4、第四次調査 完成した一切経の現在目録をもとに、マイクロ撮影機を用いて写真撮影を行う。撮影箇所は、表紙・見返・第一紙・第二紙・末尾の五か所を、原則として設定し、必要に応じて他所を加える。また、報告書を作成する準備として、カラー写真撮影の資料を整える。
- 5、第五次調査 以上の調査研究の成果をもとに、報告書の刊行を平成八年度中に達成する。その内容は別に起案する。

## Ⅲ その他の事業

この実施期間中に、機会あるごとに研究成果を発表することによって、啓蒙的な役割を果たすこととする。

以上のような調査計画を立て、妙蓮寺の絶大な援助のもとに事業を開始した。幸いに、多くの大学や研究所から広く参加して頂き、作業は予定通り順調に進んで、すでに多大の新知見を得ている。

### 三、調査の実行（一）

調査計画にもとづいて「松尾社一切経」の調査を開始するにあたって、文化庁と緊密に連絡の上、現状をできるだけ維持することを大原則として確認した。開巻によって生じてくる破片やゴミなども、まとめて保存することによって、作業終了後における各方面からの研究の可能性を確保することも要請され、慎重な作業を約束した。

こうして、九月半ばから第一次調査に着手することになり、十四日の午後に記者会見を行って報道機関に「松尾社一切経」の発見と、その概略を公表した。次いで龍谷大学での講演の折に「松尾社一切経」の調査について触れ、大学院生の参加を約束された。また、京都の大谷大学と同志社大学の学生が参加を表明し、私が非常勤講師として出講している慶応大学の大学院と文学部の学生が協力してくれることとなった。立正大学の大学院と文学部の学生を主体とする調査グループが、「古文書実習」の形でこのようにしてでき上がったのである。

#### 〔第一次調査〕

第一次調査が本格的に始まったのは、平成五年十月十六日からである。この時には四日間にわたり妙蓮寺に十五名程が宿泊して、京都在住の学生諸君を加えて約二十五人が作業にあたった。また、この時には日本史学や国文学の研究者の参加があり、文化庁と京都府の文化財の係官が臨席して、「松尾社一切経」をめぐる検討がなされ、その全体像が明らかにされるとともに、調査計画がさらに深く煮詰められた。

具体的に調査日程を組むにあたって苦慮したことは、京都と東京が遠隔地にあつて費用がかさむことと、大学の授業や行事の関係もあつて思うようには日数が取れないことである。その上、せっかく調査に参加した大人数を効果的に動かすには、かなりの苦勞を必要とするものであつた。このために継続した日程を設定することが困難で、しばらく時間を置いて十二月十九日から二十六日まで第二回目を、翌平成六年の一月十五日から十八日まで第三回目の調査を、それぞれ行った。

第四回目の調査は、四月二十九日から五月五日までのゴールデンウィークを利用して実施し、この段階で開巻作業をほぼ完成した。開巻のできた経巻は、一卷一卷を中性紙の封筒に分けて入れ、さしあたり仮の段ボール箱に納めて、ホドジンによる防虫防黴の処置を施した。手当てのできないほど破損した経巻は、別に「難」と記した箱に入れて同様な処置を施し、重要文化財に指定された絵画類とともに、保存環境の良い収蔵庫に保管したところ、後になって開巻できるものが多く見られた。保存環境の整備がどんなに大事であるかが、これによってよく分かつた。

かくて、開巻できた点数は、おおよそ三、五〇〇巻にのぼるものと思われ、この他に、水損・虫損によって開巻不能なものが約三〇〇点、軸だけがむなく残存するもの約五〇点、それに所属不明なもの数十点があり、全体で四、〇〇〇点に上るといふ当初の見当はほぼ間違いなかったものといえる。その体裁はほとんどが卷子本で、折本と、卷子本を折本に改装したものだが、それぞれ僅かばかり含まれている。

#### 〔第二次調査〕

第二次調査に着手したのは、六月の十八日から二十一日までの間に行った、第五回目の調査からである。別掲の調査カードの作成に関しては、文化庁美術工芸課の湯山賢一主任調査官にご指示をいただき、国宝・重要文化財指定のために用いられる厳密な形式に従つた。典籍の調査カードとしては、もっとも詳細な要件を備えているといえるもの



で、その調査内容については後に述べることにする。

調査が進むにつれ、一切經の經名と品名を採録し、料紙や界線の寸法、奥書や紙質などを細部にわたって記録するなど、念を入れれば入れるほど時間がかかった。一巻の調査が終わると、カードの記載事項についても一度よく確認した上で仮の番号をつけ、經卷は手漉き和紙を用いた紙袋に入れ替え、その袋に經名を墨書する。大変根気のいる仕事ではあるが、暑さの中でホコリと汗にまみれながら、熱心に作業を進めた。やがて冬のころになると、經驗を重ねただけあって調査の手順もよくなり、知識も豊かになって調査作業に深みが見られるようになって、貴重な意見が聞かれるようになった。とくに一切經を専門領域とする研究者の参加が目立って、調査内容が充実したことは勿論であるが、さまざまな新しい視点が提起されて研究範囲がとみに広がった。

これに続いて、第六回目の調査は七月二十五日から三十日まで、第七回目の調査は八月二十日から二十五日までと、夏休みをフルに利用して作業を実施した。第八回目は九月二十三日から二十七日まで、第十回目は十一月十九日から二十三日まで、第十一回目は平成七年の一月五日から九日まで、第十二回目は五月一日から五日までというように、頻繁に調査を続けていった。しかしながら、この調査作業は思いのほか手間がかかり、予定よりも少々遅延したので、計画の微調整をおこなわなくてはならなかった。このために調査の合間にも機会をみては、研究や交渉のために度々京都に足を運んで、計画のスムーズな運営に万全を期した。

調査に参加した人数は、毎日平均二十数名にも上り、調査の会場となった客殿は研究の熱気があふれていた。このように随分の苦労を重ねた末、調査カードの記入がほぼ終わったのは、平成七年五月に行った第十二回目の調査においてのことである。そこで、これまで新しくわかった事実を考慮に入れながら、完成したカードをあらためて再点検して今後の作業についての方針を検討した。

ここでまず必要とされる作業は、これらのカードを整理して原簿を作成し、「松尾社一切経」の分類目録を完成することである。これを検討するために、「石山寺一切経」「七つ寺一切経」「名取神宮寺一切経」「宗像大社一切経」などをはじめ、滋賀・奈良両県の「大般若経」の研究報告書を広く参照した結果、分類配列の基準を『貞元釈経録』に置くことにきめた。つまり、『貞元釈経録』の経名目録の番号順に「松尾社一切経」のカードを整理し、これをファィリングした上で通し番号をつける方針を固め、実地調査とは別に中尾研究室で作業を開始した。

#### 四、調査の実行（二）

第三次調査は、（Ａ）整理と調査が終わった一切経の全体を、『貞元釈教録』に収められた経名の順序にしたがって配列することと、（Ｂ）調査カードの記録事項をパソコンによって一覧表を作成することである。

この二つの事項のうち（Ｂ）については、研究室のパソコンを用いて五月から作業を開始し、冒頭の「大般若経」の輸入をまず完了し、それ以降は十二月初旬に作業を終えることができた。この結果についてはさらに入念に検討を加えた上で、報告書の原稿としてまとめる予定である。

（Ａ）の作業については、平成七年七月二十五日から三十日にかけての、第十三回目調査から着手する。まず、『貞元釈教録』の中から一セット三十巻以上の経名を選び、これに従って「松尾社一切経」の中から該当する経巻を取り出して、それぞれ別の箱（中性紙製）に分類して入れる作業を行った。これによって、ほぼ四十％程度の経巻を整理することができた。作業の手順としては、段ボール製の仮箱を二、三個を各人が担当し、読み上げられた経名を捜し出すという方法をとった。

ついで第十四回目の調査を九月一日から四日まで行い、残った経巻を『貞元釈教録』にもとずいて配列したものを、順番に箱に入れて記号をつけた。これには一経が一巻から数巻というものがほとんどで、予想よりもずいぶん手数を要した。

こうして分類した経巻の箱別分類が一応できたので、今度はもう一度これを全体の目録順に入れ替えなくてはならないし、この作業は少人数によらざるを得ない専門的なものである。したがって、十月の七日から十二日まで行った第十五回目の調査では、五名ばかりの少人数で全体的な順序を整える作業を丹念に行っており、十二月中旬現在は目下継続中で、一月中には完成させたいと思っている。

このような第三次調査の成果を見ると、一切経の冒頭を飾る「大般若経」が、六百巻のうち四百巻までも残っており、しかもこれが一つのまとまりを見せている。また、二種類から三種類の経巻が重複して混在するなど、「松尾社一切経」の全体像を把握するまでには、まだまだ問題は多い見通しである。

第四次調査は、「松尾社一切経」全体の写真撮影の作業である。史学科の研究室備付と京都府教育庁所有のマイクロ撮影機二台を使用して、各巻とも最低五カット撮影を実施する。すなわち、表紙・見返・第一紙・第二紙・巻末の五カットは必ず撮影することとし、必要に応じて部分撮影をカラーフィルムで行う。この作業においては、各巻の調査再確認とカードの再点検をあわせて行うなど、専門的な技術が必要とする段階に入る。この調査は平成八年一月から開始し、夏期休暇までには終了する予定である。

## 京都妙蓮寺蔵「松尾社一切経」調査カード

カード番号 (仮) 写真番号 平成五年 月 日 担当者 ( )  
 立正大学史学 (中尾) 研究室品川区大崎4・2・16 ( )

経名	卷子・折本		装幀	表紙	外題	見返	軸	料紙	法量	印	紙幅	補写	首題	尾題	訓点	奥書	時代	保存	備考																
	完存、(首・前・中・尾・後)欠、残卷、断簡、開卷不能、全損	伝存																																	
函号	(員数)	(経同卷)	写本・刊本	無・有(原・旧補・新補)絵・巾	cm	八双	無・有竹	紐	無・有(原・後色)	紙色	紙色	軸首	切・撥・朱頂・塗・螺鈿	楮・楮打紙・斐・斐楮紙・混漉	(墨・白・押)界	①天界巾 ②界高 ③地界巾 ④界巾	寸法≡縦 行數≡	cm	全長	行・1行	字	界線	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21	「	「	無・有(墨・朱・白・角筆・)	無・有( )	(裏に記す)	音釈	有・無	有・無	修理	裏打ち≡有・無	膏桑	有・無

## 五、調査項目

「松尾社一切経」の調査に際しては、前に述べたように、文化庁の協力を得て詳細なカードを作成した。とても骨の折れる作業ではあったが、きわめて豊かなデータを採録することができた。このカードは図のと通りの形式で、設定した各調査項目について説明を加えてみよう。

このカードは、「京都妙蓮寺蔵松尾社一切経」調査カードと呼び、所属先を「東京都品川区大崎四―二―一六 立正大学史学（中尾）研究室」とした。次に、このカードの各調査項目について説明を加える。

### 調査項目

1、カード番号（仮番号）・写真番号・調査日付・調査担当者

整理と調査の段階では、経巻を入れた紙袋の番号とカードの仮番号を対応させて作業を行い、これが終了した段階で『貞元釈教録』と題する経典目録にしたがって正式なカード番号を整える。

正式なカード番号をつける手順は、『貞元釈教録』に収録されている経名に番号をふった上でその一覧表を作成し、これに準拠して経典の順序を整えて仮の箱に入れるとともに、カードを整理しファイリングする。

写真番号は、撮影時に番号を写し入れた番号を記入する。調査日付と調査担当者は、初回の調査について記入し、その後は省略する。

2、経名・函号・写本・刊本

経名は原則として内題を採ることとし、これが欠ける場合には尾題を、さらに外題の順で、品名までを採録し

た。しかしながら、整理の段階では、まず外題を採用した上で、もし間違いがあればこれを訂正した方が能率的であったように思う。また一卷に二種以上の経巻が収められている場合には、その経名と数字を併記することとした。函号については表記の仕方が理解しにくかったので、後に写真撮影が終わった段階で、写真によって調査することにする。

「松尾社一切経」は本来すべて写経であるが、後に欠を補うために刊本が混入された節があるので、この点も注記するようにした。

### 3、装丁

「松尾社一切経」は卷子本の形で作成されたが、後にごく一部が折本に仕立て直されたり、刊本が混入したこともあるので、装丁についての記入欄を設けた。

### 4、伝存

本紙が完全に伝わっているか、あるいは欠損部分・開巻不能・全損などの破損の現状などを記入する。

### 5、表紙・八双・紐・外題

表紙の有無は表紙がある場合は最初につけられたものを「原」とし、中世までに補われたものを「旧補」、近世以降のものを「新補」と表記する。経絵があればこれを示し、表紙の幅を採録する。八双の有無と材料、紐の有無と補われた時期や色を記入し、外題の形式（左肩・中央・題簽）と題名を採録する。

### 6、見返・墨書

見返が共紙であるかどうか、箔を散らすなど装飾してあるかどうかを記入し、経絵があれば絵柄や素材について記し、また、墨書があればこれを略記する。

7、軸・軸首

軸の有無Ⅱ軸がある場合は最初につけられたものを「原」とし、中世までに補われたものを「旧補」、近世以降のものを「新補」と表記する。合わせ軸を用いたものがある場合には、その旨を注記する。軸首については、その形状を「切」「撥」と記入し、装飾については「朱頂」「塗」「螺鈿」等を記録する。

8、料紙・紙色・法量・界線・印・紙幅・補写

この項目についての採録は、原則として第二紙を対象に行い、これが欠失したり破損が甚だしい場合には、これに準じて観察しやすい料紙を選ぶこととする。

料紙は「楮・楮打紙・斐紙・斐楮紙・混漉」の項目を上げて記入し、紙色は白紙か黄檗染・丁字染を選ぶ。

計測はすべてセンチメートルの単位をもちいる。法量では第二紙の天地Ⅱ縦と巾を計測し、一紙あたりの行数と、原則として第二行目の字数とを記入する。ただし、全長は、各紙の紙巾を計測し終った段階でこれを合わせて算出する。界線では、「墨・白・押」等の種類を記し、「天界巾・界高・地界巾・界巾」等をそれぞれ計測して記入する。紙巾は第一紙から順に採録していくのであるが、この場合に袖側の「糊代」は除外して計測する。

「印」はⅠの記号を、「花押」はⅡの記号を、それぞれ料紙番号の脇に記す。この場合、継ぎ目裏に据えた場合には料紙番号と次の料紙番号との間に記し、紙背に据えた場合にはその料紙番号の脇に記入する。また、料紙の表に据えられた場合には、その旨を注記する。なお、校正の折に書き加えた「補写」があれば、その料紙番号のところに◎印を記入する。

7、首題（内題）

経典の最初に記された「経名」と「品名」を記入する。経名の下部に記される訳撰者については、後に写真に

よってこれを記入する。

## 8、尾題

経典の最後に記された「経名」を記入する。

## 9、訓点・印記・奥書・音釈

訓点の有無と「墨・朱・白・角筆」等の種類、印があれば印記と印の色を記す。奥書や校正記事があれば簡単なものはここに記し、複雑なものはカードの裏に筆記する。念の為に音釈の項を設けた。

## 10、時代・筆者

時代は「平安時代前期」・「平安時代中期」・「平安時代後期」・「鎌倉時代」・「南北朝期」・「室町時代」・「戦国時代」・「桃山時代」・「江戸時代」などという文化史上の時代区分を用いる。筆者については、筆者・校正者・追筆者などを記入することとする。これらはいずれも、マイクロ写真によって記入する。

## 11、保存・修理・膏薬

保存状況がよいかどうか、損傷がある場合には、「糊離れ・虫損・水損・鼠損」などを記す。修理については裏打の有無を記入し、小紙片を虫損の部分に貼りつけて修理したものを「膏薬」と仮に呼ぶこととする。

## 12、備考

総合的な見解や『貞元釈教録』との対照結果など、気づいた点を記入する。

以上のような諸項目を表にしたものを、A4版の用紙にカードに印刷して用意し、第二時調査に備えた。調査項目が多く、終了後の確認の必要性が認められるので、写真撮影の過程でもう一度検討を加える必要がある。



## 六、「松尾社一切經」の構成

「一切經」は「大藏經」とも称する五千余卷からなる仏教叢書で、書写された一切經のセットは、多くの場合何種類かの經典を『貞元釈教錄』などの書籍目録にしたがって蒐集したり補足した、いわば「混蔵」の形をとっている。また、驚くべき多くの写經僧によって、とても長い歳月をかけて完成したものであるから、そこには仏教文化史上まことに大きな意味を見いだすことが出来る。次に、これまでの調査結果を踏まえて、注目すべき幾つかの点を明らかにしてみたい。

まず全体の構成についてであるが、一切經の冒頭を飾る「大般若經」六〇〇卷の内、約四〇〇卷が伝存している。この「大般若經」の多くは紺紙の表紙がつけられていて、しかもその中の十数卷の表紙とその見返には、金泥と金箔で仏画が描かれている。ここには、十一世紀中葉の年紀と比叡山西塔での開講の記事のあるものが見え、「松尾社一切經」の印記はまったくないし重複も認められない。したがって、天台系の寺院で書写された「大般若經」のセットを他から持ってきて冒頭に据え、その次の經典から書写を始めたものと考えるのが妥当であろう。

大乘經典の中にも三セットほど認められる經典があり、他の一切經や「五部大乘經」などが混入した形跡がある。実際に南都の寺院をはじめとする畿内諸寺の「寺印」のあるものもあり、後世の補足を思わせる版経も含まれていて、一切經における他の經の混入という特徴をよく物語っている。しかしながら現在の段階では、欠失の状況や補足の事情等についてはまだ十分にこれを確認することができない。

「松尾社一切經」の写經においてその原本となった一切經は、奥書によると天台宗に属する近江の梵釈寺（滋賀県

大津市にその遺跡がある）所蔵本が圧倒的に多く、書写本を校正するための原本として用いられた一切経も、比叡山をはじめとする天台系寺院のものが顕著である。その一方で、南都系の寺院名のある經典が見られ、かつて国分寺で読誦された護国の經典「金光明最勝王經」にとくに訓点が施されていたり、奈良仏教で流行した「則天文字」（野沢氏のご教示による）が頻繁に用いられた經典が認められるなど、南都における諸寺院の深い影響も無視することはできない。

これらの事柄から考えると、「松尾社一切経」は、天台宗系の寺院で完成された「大般若經」を冒頭に置き、ついで天台宗系の寺院に所蔵されている一切経を原典とし、南都仏教の影響を受けながら書写と校正の事業を進めたものといえる。これは、松尾社の神宮寺が天台宗系の系譜を持ち、畿内を舞台として活躍する「聖」の活動範囲に位置していたことを考えれば、十分に理解出来るものである。

一部「混蔵」という形を持つ「松尾社一切経」は、十二世紀の初期—おそらく永久三年（一一一五）—に発願されて、同世紀の半ば過ぎ—長寛元年（一一六三）ころ—に完成したものと見られる。願主は松尾神社の神主を勤める秦宿祢親任をはじめとする秦氏一族で、その子秦宿祢頼親の代に完成した。秦宿祢親任は、三歳の時に権神主になり、十三歳の時に神主職に任じられた人物で、秦氏一族の長であった。「松尾社一切経」のうち「大方広仏華嚴經卷第五十五」など数巻の經典に記された奥書に、秦宿祢親任を長とする秦氏一族の名が、あたかも系図を見るように書き連ねられていて、当時の族的結合を示す好史料として注目される。

江戸時代の松尾神社絵図によると、本殿の左側にあたる場所に十禅寺という神宮寺が見え、「先代日次記」という江戸時代の記録（『松尾大社史料集』記録編所収）には、神宮寺の中に「読経所」があって、ここで神前読経の儀式が執り行われていたことが伝えられている。また、松尾神社の中世文書には、天下泰平を祈るために「大般若經」を

しばしば転読したことが記されている。これらのことから考えると、「松尾社一切経」は松尾神社の神宮寺で完成し、松尾神社の神前に捧げられた後に神宮寺の読経所に安置され、神宮寺の僧侶によって読誦され続けたのである。

## 七、「松尾社一切経」の伝存

松尾神社の神宮寺に安置された「松尾社一切経」は、多くの僧侶たちによってたびたび閲読された。中でも「大般若経」は「天下泰平」の祈りを込めて幾度も転読されたことが知られ、とくに「巻第五十三」については、皇賢らによって十一回も繰り返して読まれていることが記録されている。このことは当然のことながら帯出や破損などによる欠失を招くことになり、他の一切経などによる補充が行われたはずである。松尾神社の南方に位置する地藏院にあったと思われる「地藏院一切経」の墨印のある数巻が、「松尾社一切経」の中に混入しているのは、その一例である。

「松尾社一切経」の虫干や修理がたびたび行われたことも、經典の奥書によってこれを見ることが出来る。室町時代には、嘉吉三年（一四四二）に大規模な虫干が行われ、ついで四年後の文安四年（一四四七）に経櫃が新たに造られて、「松尾社一切経」があらためて収められた。「松尾社一切経」が妙蓮寺の宝蔵から発見された時には、この経櫃に入れられたままの状態であり、側面には経名が墨書されている。そのひとつに「文安四年」の銘文が認められる。

次いで江戸時代の初期に大幅な修理が加えられた形跡があり、京都東山の法然院に現存する四十五巻ばかりの「松尾社一切経」が流出したのは、この時のことであろう。法然院には、寛永八年（一六三一）の「松尾社一切経」に関する記録が「松尾社神宮寺一切蔵経目録」として伝わっていて、この時点で「松尾社一切経」の四七一二巻が現存し（伊藤益「法然院蔵松尾社神宮寺一切蔵経目録（翻印）」大東急記念文庫『かがみ』第一六号所収）、三三〇巻程の経

巻がすでに失われていたことがわかる。

幾度かの修理が行われたということは、記録だけではなく一切経そのものにも痕跡をとどめている。表紙について見ても、明らかに江戸時代と見られるキラを散らしたオレンジ色のものがあり、元のものを取り替えた様子が窺える。本紙そのものについてみても、途中で紙質や筆跡の異なった部分が継いであったり、一センチ四角程度の小紙片で虫損の穴を塞ぐ手当て（「膏藥」と呼ぶ）を施し、天界や地界に細長く裏打をし、さらには折本に仕立て直したりしたものさえある。破損しやすい紐も取り替えたものが多く、軸も装飾によって三、四種類にわかれる。經典に刻まれたこれらの痕跡から見ると、相当大掛かりな修理が何回か繰り返されたことを窺い知ることができる。

幕末になって、「松尾社一切経」にとって決定的な事件が起こった。「先代日次記」の嘉永七年（一八五四）三月三日の記事によると、「松尾社一切経」が納めてあったと思われる「読経所」がこの日に「畳まれ」という。つまり、大量の「松尾社一切経」を読経所からどこかに運び出した上で、建物を取り壊したのである。

一旦姿を消した「松尾社一切経」が法華宗の本山妙蓮寺に再び現れたのは、それから三年後の安政四年（一八五七）のことである。もともと妙蓮寺の有力な檀家で、妙蓮寺がその一拠点となった「仏立講」という法華系信仰団体の代表的なメンバーであった嶋田某氏が、母の写経した法華経八巻に添えて「松尾社一切経」を妙蓮寺に寄進したのである。その間の経緯についてはよくわからないが、経櫃の蓋裏のひとつに「安政四年 嶋田氏」の記事があり、法華経八巻の写経も現存している。

妙蓮寺に搬入された「松尾社一切経」は、三十五合あまりの経櫃に入れられて、庫裏の裏手にある宝形造りの厳重な宝蔵に納められた。この宝蔵は「新土蔵」と呼ばれていたらしく、一切経が奉納された前後に建築されたものと思われる。しかしながら、土蔵の壁は二重の防火壁で中に砂が封入され（尾崎恵隆上人のご教示による）、土間の中央

に太い格子戸の納入庫がしつらえてあり、極めて嚴重な造りであったといひ（飯田信栄執事長談）、「松尾社一切経」を納入するためにとくに建立された土蔵ではないかと思われる。この土蔵が取り壊されて、書院の庭前にある現在の宝蔵に移されたのは、ごく近年の昭和四十二年のことである。

### 終わりに

妙蓮寺の宝蔵から発見された「松尾社一切経」の調査は、大勢の専門家や学生の参加と協力を得て、予定通り進捗している。これまでに得ることの出来た「松尾社一切経」についての知見は実に豊かなもので、その文化財としての価値はもちろんのこと、学術的にも注目すべき史料であることがいえる。

平成八年からは、いよいよ調査の確認作業を伴った写真撮影の段階に入り、晩秋のころまでには報告書の完成を期したいと思う。これら一連の作業を遂行するにあたっては、これまでどおり大学院と学部「古文書実習」科目として位置付けるとともに、広く学界の要望に応じた開かれた事業としての性格を、基本的に持ち続ける方針である。

これらの研究調査の成果については、講演会・展覧会・雑誌・新聞・テレビなどを通じてしばしば紹介し、とくに平成七年十月二十一日に、京都文化博物館で開催された「立正大学公開講座」では、「幻の一切経発見―妙蓮寺蔵松尾社一切経をめぐって―」と題する講演を行い、図録を発行する機会を与えられた。また、平成六年度には文部省科学研究費（個人研究C）の交付を受け、福武学術財団からは平成七年度の研究助成費をいただいた。所蔵者であり調査活動の主催者である妙蓮寺から、有形無形の援助を賜っていることは、まことに筆舌に尽くせないほどである。

調査作業はこれからも延々と続くのであるが、このように多方面のご理解とご協力を寄せられ、内容の充実した活

動ができることを何よりも幸いと感謝している。この度の報告は第一回目であるが、いずれ第二回目の発表を行って、調査作業全体の総括を試みたいと思う。

(平成七年十二月二十五日稿)